

製鉄体験成果 磨き掛け

大東・6年生、文鎮仕上げ作業

地域に伝わる製鉄文化の学習に取り組んでいる一関市立大原小学校（佐藤啓校長、児童86人）の6年生は5日、同市大東町大原の同校で、たたら製鉄体験で取り出した鉄から作った文鎮の仕上げ作業を行った。1年間続けてきた学習の締めくくりで、卒業記念品の文鎮に自ら磨きを掛け、鉄作りの思い出を胸に刻んだ。

鉄作りの学習は、たたら製鉄などの伝承活

動を行う地元のボランティア団体「ホッパの会」の指導で旧内野小学校時代の1999年から続けており、2024年度で26回目となった。6年生は昨年8月に大原の砂鉄川で鉄の原料にする砂鉄を採取。9月に砂鉄川最上流部にある砂鉄川たたら製鉄学習館でメインのたたら製鉄を体験し、二つの炉から12kgの鉄を取り出した。

採取した鉄は奥州市水沢にある及源鑄造の協力を得て炉で溶かし、鑄型に流し込んで縦約6.5㍍、横約5㍍の文鎮に成形した。

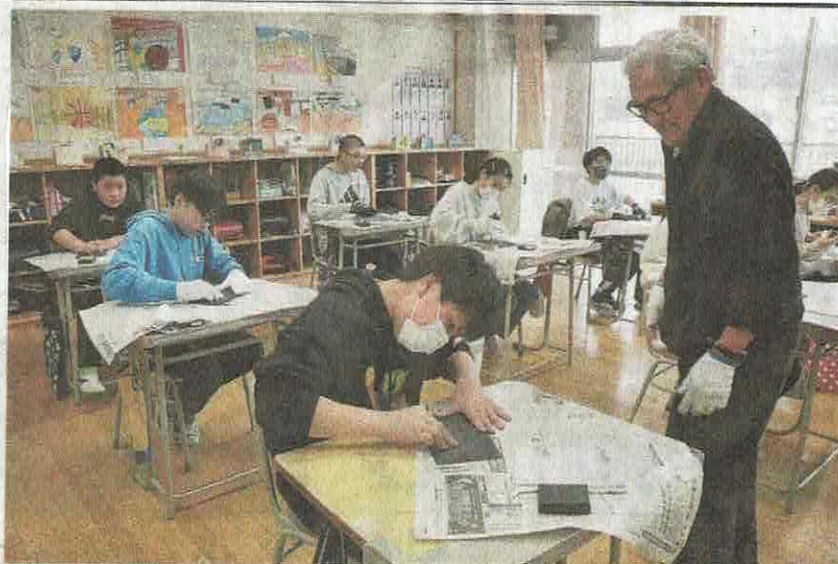
同日はホッパの会の会員3人が大原小を訪問。6年生14人はそれぞれ「大原」「絆」の文字と校章、卒業式が行われる「2025・3・

19」の文字が入った文鎮に工具や布やすりなどを使って磨きを掛けた。

鈴木優斗君（12）は「結構力を使うので腕が痛くなる」と話しながら一生懸命に文鎮を磨き、「炉を解体して鉄を取り出した時が思い出に残っている。思ったよりも立派な文鎮ができそうなのでうれしい」と仕上がり具合を確かめていた。

同会の勝部欣一事務局長は「手作りの卒業記念品をたたら製鉄の体験や小学校の思い出として大事にしてほしい」と願っていた。

6年生はパワーポイントを使って1年間の学習を振り返る発表も行い、会員に感謝の手紙を手渡した。



ホッパの会の会員から教わりながら卒業記念品の文鎮を磨く大原小の6年生